

オミクロン株の

突起30カ所変異

感染研、感染力の増加懸念

新型コロナウイルスの新変異株、オミクロン株は人の細胞に侵入する際の足掛かりとなる表面の突起に変異が際立つて多いのが特徴だ。感染力の増加や、ワクチンや抗体薬が効きにくくなる可能性が指摘されている。ただ、重症化しやすくなっているかどうかまで特性はまだ十分明らかではない。

国立感染症研究所によるデータによると、オミクロン株は「スペイクタンパク質」と呼ばれる表面の突起に約三十カ所の変異が生じている。米スクリプス研究所が公開する

つかの変異について「細胞への侵入しやすさに関連する可能性がある」とし、感染力の増加を懸念する。

ワクチンを打てば、スペイクタンパク質を標的にして結合し、ウイルスが細胞に侵入して感染するのを防ぐ抗体が作られる。

オミクロン株は多くの変異があるため、うまくウイルスに結合できず効果が落ちる恐れがある。同様の仕組みで抗体を使った治療薬の効果にも影響が出るかもしれない。

ただ現状はデータが限られてしまい、従来株に比べてどこまで危険なのかは十分評価できていない。世界保健機関（WHO）は各国に調査や研究を進めるよう求

めている。大阪健康安全基盤研究所の本村和嗣公衆衛生部長は「今後検出された場合に国内での拡散を防ぐ

ため、検疫所や国の情報を自治体などと速やかに共有する」ことが必要だと訴える。